

市宮一
館物博
りより
だ

No.24 1999.3.



「無心照月」 佐藤一英

仏教哲学の空・無の思想は、青少年時よりつねに佐藤一英の心の奥を去来していたが、晩年はインド哲学にも触れ、いっそう思索を深めた。絵は観世音菩薩。作品は、昨年ご遺族から寄贈いただいた内の一つ。

催し物のご案内

平成11年度は、特別展を1回、企画展を1回、収蔵品展を2回、作品展を1回開催します。

春季企画展

趣味の絵画と焼物あれこれ

4月24日～5月30日



染付松梅亀文透彫八角皿(江戸後期)

古来、美術品には植物・動物・山水など自然の風物がデザイン化され描かれてきました。やがてそこに神道・仏教美術の要素も取り入れ、美を遊ぶ楽しみが民衆に広まりました。本展では、江戸期から近代までの絵画と焼物を眺め、花鳥風月や吉祥文様など、日本人の日常生活の中に根付いてきた多様な美意識を探ります。絵画では、狩野派から川合玉堂に至る雅人たちの作品約25点。焼物では伊万里・九谷・瀬戸・犬山焼など約50点を展示。

収蔵品展 尾張の民具

7月24日～8月31日

現在博物館で収蔵している民具を衣・食・住・生産・生業などをテーマに展示し、それぞれの資料を博物館ではどのように整理しているのかを紹介し、さらに、民具の見方・とらえ方を考えます。



特別展・佐藤二英生誕百年記念

河井寛次郎と棟方志功展

10月9日～11月21日

郷土の象徴派詩人佐藤二英は、ことし生誕百年を迎えます。棟方志功は、昭和11年に「英の長編詩「大和し美し」の版画巻を発表し、これが当時民芸運動を展開していた柳宗悦、河井寛次郎・浜田庄司らに認められ世界的大版画家となる契機となりました。陶工河井寛次郎との出会いは、志功のその後の制作活動に大いに影響を与え、彼を仏法的テーマへと導いた心の師匠として生敬仰しました。本展は、寛次郎と志功、二人の魂の響き合いを探ろうとするものです。



河井寛次郎《白地草花絵扁壺》
河井寛次郎記念館蔵

収蔵品展

くらしの道具—今と昔—

1月8日～2月20日

今回で9回目となる、歴史を習い始める小学校3年生のための展示。明治・大正・昭和にかけての生活道具を展示します。



作品展

手つむぎ・染め・織り展

3月5日～20日

織維講座生・尾張もめん伝承会員の第11回
作品発表会です。

1998 retrospection

展覧会の回想

平成10年度は、特別展を1回、企画展を4回、
作品展を1回開催しました。

春季企画展 音聴への誘い—蓄音器—

4月25日～5月31日



エジソンの蓄音器発明121周年、「二宮毛織音頭」発表50周年を記念して行った展示では、第2次世界大戦前の蓄音器・SPレコードの時代を振り返りました。

振り返り、激動する21世紀に向けての指針のつを

夏季企画展 平野のムラに暮らす

8月1日～9月6日

多くの水路が流れ、なみなみと水をたたえた水田。水とともに田んぼにやつてきたコイやフナ、ウナギにナマズ、タニシ。最近では、フナ味噌が大好きであったり、ハエの押しずしが祭りのときには欠かせなかつたという、沖積低地に暮らす私たちの文化的特徴が消えつつあります。この展示では、その特徴がいつから始まったのか、弥生時代に遡って考えました。



特別陳列 新収藏品展—近代の美術

10月10日～11月23日

作家自身やその遺族ならびに所蔵家からの寄付、あるいは寄付金により収集してきました当館及び市の美術品コレクションの中から、近代の絵画58件を展示しました。主な出品作は、「宮出身の松本盛春・小川鴻城・社本我泉をはじめ、金島桂華・堂本印象・川崎小虎・我妻碧宇らの日本画、鬼頭鍋三郎・藤井外喜雄・小島俊男・島田章三らの洋画です。中でも、当館のアフレスコ画を描いた絹谷幸二の新作「朝陽希望」は話題を呼びました。



小川鴻城作「緑野」
二宮市博物館蔵

特別展 シルクロード陶彩の華 加藤卓男展

1月10日～24日

「三彩」の技法をもつて、平成7年重要無形文化財保持者に認定された加藤卓男氏の多彩な活動の中から、原点であるラスタール彩と頂点としての三彩を中心に青釉・藍彩・古陶磁・素描等を展示しました。

企画展

くらしの道具—今と昔— 平野のくらし・山のくらし

2月2日～3月7日

今年で8回目となった今回は、重要有形民俗文化財に指定されている岐阜県揖斐郡斐那徳山村（現在は藤橋村に編入）の山村生産用具を、二宮で使われていた道具と比較し、自然環境によつて道具の形や素材にどのような違いが生じるのかについて考えました。さらに、「平野のおじいちゃん」はもちろんのこと、「山のおじいちゃん・おばあちゃん」が登場し、昔のくらしについて子どもたちに語ってくれました。

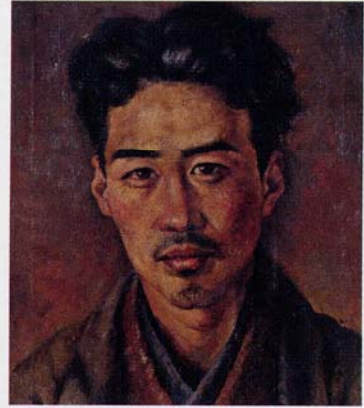


作品展 手つむぎ・染め・織り展

3月14日～28日

繊維講座生・尾張もめん伝承会員の第10回作品展発表会が行われました。

古典的象徴派の詩人 佐藤 一英



佐藤一英25歳の肖像画(藤井外喜雄)

佐藤一英の生誕と詩壇への道

佐藤一英は、明治32(1899)年10月13日、長子の当時の風習として、母はまの実家中島郡祖父江町下丸湖山新田・佐藤源兵衛方で生まれた。本年は生誕100年の節目にあたり、生誕日には一英を記念した「ふるさと切手」が発行される運びとなっている。父は広三郎で、中島郡萩原町高松本郷居住。36年4歳の時父母とともに中島郡一宮町に転住、39年には町立一宮男子尋常小学校(現一宮市立大志小学校)に入学する。41年萩原町の実家に戻り、翌年町立萩原尋常小学校に転校した。萩原尋常高等小学校・愛知県第二師範学校(現愛知教育大学・放校処分)を経て、大正7(1918)年19歳で早稲田大学高等予科文科科に入学、エドガー・ア

ラン・ポーの詩に心酔し、詩人として生きる決意をする。同期生には吉田穂、横光利二、中山義秀等がいた。三富朽葉の絶筆「散文詩」微笑に就いての反省」に感動、これを契機に福士幸次郎、渡辺義知等を知る。8年、「新潮」に投稿した「軽さと重さ―菊池寛への公開状―」により菊池から小説の執筆を勧められるが詩人として立つことを言明し、横光を推薦する。9年、「右の者」大学教育の必要なきに付き」の退学届を出して早稲田大学を中退する。10年、名古屋に転居し(昭和4年まで)、数ヶ月間の仏教的狂信生活を送る。牧師金子白夢を知る。中京高等女学校(現中京女子大学付属女子高校)に奉職し英語・国語の教師となる(同4年まで)。大正11年23歳で小村たまを(17歳)と結婚する。第1詩集「晴天」を江崎正文堂(名古屋)から刊行する。福士幸次郎は、この年で

2度目となる尾張平野に遊び、一英の紹介で尾西市玉野の善福寺で2ヶ月間滞在し、著作「原日本考」の想を練る。いま境内に「福士幸次郎先生原日本考発想の地」の石碑が建ち、彼の言葉「濃尾平野は日本のメソポタミアであり、木曾・長良の両川はチクリス・ユウフラテスにあたる」と刻まれる。昭和4(1929)年単身上京、東京市外野方町上高田238(現中野区野方町)に下宿、児童用の古典の口語訳を執筆する。翌年、「新訳平家物語読本」「新訳太平記物語読本」「新訳保元平治物語読本」を東京文教書院より刊行した。6年には児童文学の革新を目指した雑誌「児童文学」を編集することとなる。

雑誌「児童文学」編集の頃

昭和6年、満州事変勃発。7年、満州国建国宣言、五・二五事件が起きるなど、雑誌「児童文学」が出版された時期は、時局が第二次世界大戦に向けた戦時体制へと突入していく激動の時代であった。この時、「純粹童話・詩的童話」をモットーに「児童文学のルネッサンス」を目指す季刊雑誌として、一英は「児童文学」第1冊・第2冊を編集、文教書院から発行する。雑誌「児童文学」の構想にあたっては、詩人春山行夫を中心とする「詩と詩論」の執筆者と、詩人百田宗治を中心とする「中野会」が重要とされ、参会者には福士幸次郎・伊藤整・石川善助等がいた。一英は、昭和6年前半ごろ「中野会」に月1回出席し、この二つのグループから主要執筆者が選ばれた。6年7月刊の第1冊には、宮沢賢治・一英の他に横光利二(面)、石川善助(海に忘れた人形)、福士幸次郎(豚泥棒)、百田宗治(わたり鳥)、伊藤整(イエナと月)、「睡り羊」、宇野浩二(人にすぐれた芸)らが、7年3月の第2冊には、前号の執筆者に草野



写真はすべて「大和し美し」より
(右)建命の柵
(左)賊火の柵

心平（「風船はあがりたくありません」、佐藤春夫（「幼児の夢」）らが出た。季刊の予定が売行き悪く、第2冊で廃刊になり、残った雑誌の本紙を装丁しなおして、8年には『現代童話名作集』上・下として同じ文教書院から再発行された程である。

雑誌「児童文学」へ宮沢賢治を登用

宮沢賢治と佐藤一英は、熱烈な数通の手紙の交信を持ったものの、直接の面識はなかった。昭和4年に知りあった石川善助を通じて賢治を見出し、児童文学への寄稿を勧めた。特に第2冊は賢治のために編んだと、後に一英は述懐する。その頃、善助は草野心平の家に同居していたことがあり、また心平は賢治の『春と修羅』を読んで感動、心平主宰の詩誌『銅鑼』（大正14年創刊）に勧誘、賢治は13篇の詩を発表した。心平から善助へ、善助から一英への経緯で、一英と賢治は交流したと思われる。賢治は、両号に「北守將軍と三人兄弟の医者」「グスコ―ブドリの伝記」（伝記の方は棟方志功挿絵）を発表。未刊に終わった第3冊に「風の又三郎」を用意した。善助は昭和7年6月不慮の死を遂げるが、翌8年6月刊行された遺稿集『鴉射亭隨筆』に賢治は心のこもった追悼文を寄せた。

佐藤一英と棟方志功との回合

棟方志功と佐藤一英は、昭和5年頃志功と同郷の福士幸次郎の紹介で回合したと見られる。最初の共同作品が、6年、「児童文学」第1冊誌での一英の「マフィンちゃんの三つの望み」への挿絵であった。一英は、数年間の思想的混迷を整理するため長詩「大和し美し」を執筆・完成、翌々8年、「新詩論」第2輯に発表する。10年、

新韻律詩「鬼門―ある巫女の呪文―」、聯組詩「空海頌」47篇を完成する。同年、11年と「新韻律詩抄」「大和し美し」を相次いで刊行、詩壇ばかりでなく音楽会・美術界にも大きな刺激を与えた。志功は、11年、英の長篇詩「大和し美し」を板画巻に制作、民芸運動の柳宗悦・河井寛次郎・浜田庄司らに認められ、世界的大版画家への足掛かりを掴んだのは周知の事に属する。翌年にも志功は「英詩を基にして大作」「空海頌」「東北経鬼門譜」を世に問う。従来志功と一英の版画としての交流はこの3作のみと見られていたが、一英の和訳「観音偈」（12年「大法輪」に発表）の強い影響の下に、翌年「観音経曼陀羅」が制作されたことが、一英の未発表原稿により主張されている。福士幸次郎を介して交流した両者は、その後、それぞれの道を歩むことになる。一英は、独自の定型押韻四行詩「聯」を生み出すなど新韻律運動に多大の業績を残し、戦後ふるさと宮に定着する。また、幸次郎とのふれ合いの中で尾張は日本文化の発祥地というユニークな「櫻の木文化論」を唱えた。青森への望郷の念を生涯抱き続けた志功は宗教と回合しながらその作風を展開させて行く。

ふるさとに定着した戦後の佐藤一英

一英は、昭和21年帰郷、友人等に「日本の文化は櫻の木から出来た」という「櫻の木文化」の構想を語る。26年、古代文化への詩的思索から現代文明に警告する独自の「櫻の木文化論」を展開し、29年には「万葉集」巻十「よみ人知らず十首」について尾張高松（宮市萩原町高松）説を立て「万葉の歌枕」を毎日新聞に発表、万葉論争を引き起こす。32年、「板画と詩の心」に関して棟方志功と対談、ともに円空仏を見

る。この年設立・開園に尽力した「宮市万葉公園」が完成する。36年、仮設「万葉記念館」を高松公民館に設置、櫻の木の民具百数十点を展示する。42年、現代詩の頂点に立つ傑作ともされる長詩「終戦の歌―ヒロシマの瓦―」を発表する。44年、高松白山社側に「宮市櫻の木文化資料館」が完成する。櫻の木の民具約三百点を収蔵。54年8月24日逝去、享年79歳。同年、地方文化の推進に尽力した功績により民間人最初の「宮市市政功労者」として礼遇される。生前一英は、数々の校歌類を作詞した。一宮市立万葉保育園歌等保育園歌？・幼稚園歌！・一宮市立萩原小学校歌等小学校歌14・尾西市立第一中学校歌等中学校歌10・愛知県立稲沢高等学校歌等高等学校歌4・市郷学園短大校歌1・中部大学校歌1曲等々がある。

（小野田雅一）

（参考文献）

『佐藤一英詩集』佐藤英詩論・随想集（講談社 昭和63年）

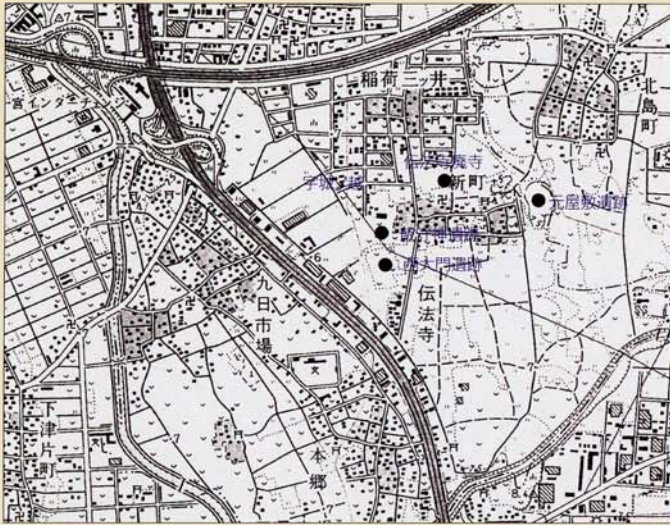
『佐藤英歌曲集ふるさとのうた』（同刊行会 平成3年等）

（右）草薙の柵
（上）橘姫の柵
（左）倭姫の柵



発掘調査の成果から

—元屋敷遺跡の中世戦国期の遺構—



遺跡の位置 (1/50000)



遺構の検出状況

元屋敷遺跡は、昭和36年に土取り工事により発見・調査された遺跡で、弥生時代前期の溝と、古墳時代前期の竪穴遺構が検出された。そして、出土した土師器群は、元屋敷式と呼称され、長く東海地方の古墳時代前期の標識遺跡とされてきた。

平成8年1月から9年8月まで実施した区画整理事業実施に伴う事前調査で、約9000㎡を調査した。従前、元屋敷遺跡については、弥生時代前期、そして古墳時代前期の遺構、遺物に主眼が置かれてきたが、中世戦国期においても、勝るとも劣らない有数の遺跡であることが判明している。

以下、該期の遺物、遺構について簡単に紹介する。戦国期から近世初頭の遺構は、調査区のほぼ全面で確認している。中心となる遺構は、溝、土坑、ピット、井戸などである。そのうち注目すべき遺構は、溝で区画された方形区画で、こうした区画を接続して検出している。

明確なものは、二辺約14m前後の区画で、他に二辺約25m前後と推定されるやや大型のものもある。これらの遺構は、戦国期における屋敷地と考えられ、区画溝の内側では、柱穴と考えられるピット群、井戸などを確認しており、元屋敷遺跡周辺が中世戦国期においては生活域であったことを示している。そして、こうした方形区画が、この元屋敷地区の旧畑面全体に展開していたものと推定してよからう。

丸山竜平氏は、こうした区画が接続して継続したより広い範囲の城館跡の存在を推定し、伝法寺地区に接する三ツ井地内南端にある小字上城之越・下城之越と関連付け、城の越・元屋敷遺跡という広い範囲の遺跡として捉えることを提唱してみえる(丸山竜平・深貝佳



廃棄され埋められた井戸

世「尾張北部における平地城館址の諸問題―宮市東部の事例から―」(愛知県史研究第2号「1998」)。

小字上城之越に近い飯守神遺跡、西大門遺跡でも中世の遺構、遺物は検出しているが、元屋敷遺跡ほど濃密なあり方ではなく、戦国期までさがる遺物の量も少ない。また、両者の中間地点や北よりの伝法寺廃寺地区においても調査を行ったが、東半では遺構、遺物がかかり濃密に分布するものの、西にいくに従って希薄になる。また、小字城之越地区と元屋敷遺跡は、距離的にも500mほど隔たっていることから、遺構の連続性が確認できない現況においては、同一の遺跡として捉えることには無理があるものと思われる。将来、遺構等の連鎖性、連続性が確認できれば、かなり広大な城館跡・屋敷地と言いうことができよう。しかしながら、現況では魅力ある仮説と言わざるを得ず、従前の元屋敷遺跡の枠内で考えていきたいと思う。

いずれにしても、元屋敷地区に近世初頭まで存在した屋敷地が、何らかの要因によって移転したという事実はあるわけであり、報告書作成に向けての大きな課題であるといえよう。

(土本典生)

あらたなるこころみ

博物館実習

博物館には毎年、夏になると大学生がやってきます。これは、学芸員の資格を取得するための実習を受けにやってくるのです。去年までの5日間の日程を12日間に延長し、また、8人の実習生を「考古」「歴史・美術」「民俗」の3部門に分けて実施しました。

歴史・美術編

7月8日のガイダンスでスタートし、11月25日の反省会まで、断続的に延べ13日間の実習でした。博物館設立の経過・常設展示の基本構成に始まり歴史・美工部門を網羅するものでしたが、本年度初めての試みとして妙興寺境内・建造物の見学と宝物庫の整理補助を行うとともに、岐阜市内の各種館園3館を見学しました。期間が長すぎた反省点もありますが、実習生にとっては今までに無い体験もあり実り多かったものと思われます。(担当/毛受英彦)

実習を終えて

内容が充実していて、博物館の仕事がどれほど多岐に渡るものであるかがよくわかりました。価値のある実習ができたと思います。(森島弥月)

実習では、何事に対しても挑戦することの大切さをいろいろな方から教えていただきました。また、大学では体験できない博物館の雰囲気を感じることができた実習期間は、これからの自分の人生のよい糧になると思います。(富板享司)



妙興寺宝物庫の整理



出土遺物の実測

考古部門は、出土遺物の整理に主眼をおいて実施しました。土器の水洗に始まり、注記・実測・写真撮影・図面トレース・遺物観察表の作成・割付など、報告書作成の過程をたどりました。

担当学芸員が、やや欲張りすぎた感もあり、特に実測作業では、文様の割付など初めての人には相当困難な作業も課してしまいましたが、実習生は2名とも必死にがんばってくれて、無事完成することができました。(土本典生)

実習を終えて

最初は10日間は長いと思っていましたが、始めてみると毎日新しい作業の連続で10日間では足りない気がしました。見たこともない器具を使った「実測」は難しく、苦勞してなんとか資料の形に近付いた時は、本当にうれしく思いました。(川島美幸)

私にとって、考古学は未知の分野でしたが楽しく、充実した時間を過ごすことができました。未知の事柄に惹かれ、楽しく学ぶというこの経験により、何ごとにも積極的に取り組む勇気を培うことができました。(木村知啓子)

考古編

今回の博物館実習は、日程が夏期～秋期だったこともあり、「講座の準備・本番・片づけ」という普及活動の実習が、その中心となりました。「名古屋市博物館 夏休み歴史教室」のみなさんに、カラムシの糸づくり(編布で使う場合)を説明・実技指導したときなど、最初は戸惑ったり、少々ずっこけることもありましたが、なかなか堂に入ったものでした。夏休みということで、担当学芸員の繁忙期にあたったため、炎天下で縄文クッキーを焼いたりといった博物館講座の手伝いが多く、ずいぶん辛い実習となりましたが、明るく来館者に接してくれたことをとてもうれしく思いました。

民俗編

また、周辺の3館(稲沢市荻須記念美術館・師勝町歴史民俗資料館・尾西市歴史民俗資料館)を見学し、学芸員からいろいろな説明を受ける中で、少しずつ博物館というところに対する意識が変わっていくのがわかりました。この体験を、これから少しでも活かしてくれたらと思います。(担当/久保禎子)



今年も博物館では、さまざまな講座や講演が開かれました。

8/23「石器づくりの今昔」
名古屋見晴台考古資料館学芸員 水野裕之先生
下呂石や黒曜石を材料にして、石鏃や石槍に挑戦してみました。鹿の角がなかなか言うことをきかず、みんな悪戦苦闘していました。

8/9「煮炊きの道具の歴史」
豊田市郷土資料館学芸員 森森通先生
尾張地方の弥生時代後期〜古墳時代にかけての主な煮沸具だった台付甕で、コメを炊いて食べてみました。熱効率は抜群で、玄米でしたが、おいしく炊き上がりました。

8/2「縄文時代の食べ物」
名古屋大学文学部教授 渡辺誠先生
この講座では、妙興寺にはえているカシやナラの木のドングリ(ナラガシワ・シラカシ・アラカシなど)をあく抜きをしてつくった縄文クッキーを味わってみました。

夏休みの期間中、「講演」と「体験」をセットにした講座を3回にわたって開催しました。



夏休み特別講座
「考古学を楽しむ」
8月2・9・23日の3回



今年で3回目のこの講座、今年のテーマは「弥生のムラ」。コメづくりが始まって、人々はどんなムラをつくっていたのでしょうか。尾張、そして伊勢湾の様子だけでなく、東と西からの目で、3人の先生にご講演いただきました。

博物館講座 「尾張平野を語る3〜弥生のムラとムラをつなぐ〜」



博物館講座
「妙興寺…歴史と自然観察会」
11月1日

博物館の隣にある妙興寺の森で、歴史的な建物と植物をはじめとした自然について学び、観察し、文化と自然の融合を体験しました。講師は、奥小学校校長 近藤修先生。

『尾張平野を語る 講演録 1996・1997・1998』が発刊!

博物館では、平成8年度から3回にわたって行ってきた、講演会シリーズ『尾張平野を語る』に、ひと区切りをつける意味で、3回分の講演録を発刊しました。テーマは、「1/人と自然と文化のはじまり」「2/中世の尾張平野」「3/弥生のムラとムラをつなぐ」。合計12人の先生方のお話の中には、最新情報がたくさん盛り込まれています。詳しいお問い合わせは、博物館まで。



バンザイ!焼き上がったぞ!!

博物館講座
「土器をつくろう」
12月5・6・20日の3回

今回から親子を対象にして募集したところ、13組26名の参加を得て実施することができました。土器を制作中も、親子でここをこうしたらとか、親が子どもにこうするんだってでしょと教えたりといった光景があちこちで見られほのぼのとした講座になりました。また、土器の野焼き中の空いた時間に、縄文クッキーに挑戦したり、赤米を煮たりと忙しい講座でした。

編集後記

平成10年度も終わってしまい、1年に1号しか発刊できず、「これでは、「たより」になっていない」というお叱りの言葉を受けそうです。しかし、今年もは意欲的に『尾張平野を語る 講演録』をなんとか発刊することができ、みなさんにご覧いただけるようになりました。12人分のテープおこしやレイアウトは、なかなか辛い作業でした。

また、これからは「地域で子どもを育てる環境を整備」すること。「もう8年前からやっているぞ」と思いつつ、「もっとやれということか」とも思い、新しい4月を迎えます。(T-K)

利用案内

名鉄名古屋本線「妙興寺」駅下車徒歩7分

〒491-0922 一宮市大和町妙興寺 2390

TEL 0586-46-3215 FAX 0586-46-3216

【観覧料】(常設展・聴講料含む)

一般=200円(160円) 高・大生=100円(80円)

小中生=50円(40円) *()は20人以上の団体料金

【休館日】毎週月曜日、休日の翌日、年末年始

【開館時間】午前9時30分～午後5時(入館は4時30分まで)

※第2・4土曜日は小・中学生無料。

※満65歳以上で、一宮市発行の「老人医療受給者証」

あるいは「シルバー優待証明書」持参の方は無料。



一宮市博物館だより第24号
発行日……平成11年3月31日
編集・発行……一宮市博物館
印刷……サンメッセ株式会社